

国際日本研究センター

International Center
for Japanese Studies

NEWSLETTER

ニューズレター

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>
2017.04 No. 20

- 比較日本文化部門 研究会「農本主義をめぐる磁場—歴史そして現在」 Comparative Japanese Culture Division : Seminar "Historical Significance of Physiocracy/Peasantism: Past and Present" 1
- 国際日本教育部門 国際シンポジウム「国際日本研究と日本語教育—『日本をたどりなおす 29 の方法—国際日本研究入門』をたどりなおす—」 International Symposium "Retracing '29 Ways to Travel back to Japan' : Japanese Studies and Japanese Language Education" 1-2
- 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 20 回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 20th Research Seminar 2-3
- 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 21 回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 21st Research Seminar 3-4
- 比較日本文化部門主催 研究会「アルゼンチンの日本意識の変化」 Comparative Japanese Culture Division : Seminar "Change of the image toward Japan in Argentina" 4-5
- 2016 年活動報告 (2016 年 10 月～2017 年 4 月) Activity Report (Oct.2016-Apr.2017) 5-6
- お知らせ NOTICE 6

比較日本文化部門 研究会「農本主義をめぐる磁場—歴史そして現在」

Comparative Japanese Culture Division : Seminar "Historical Significance of Physiocracy/Peasantism: Past and Present"

- 日時 : 2017 年 3 月 17 日 (金) 15 : 00 ~ 17:00
- 場所 : 東京外国語大学 本部管理棟 中会議室
- 発表者・講演者
 - ・ 野本京子氏 (東京外国語大学 教授)
 - ・ 綱澤満昭氏 (姫路大学 学長)
 - ・ 岩崎正弥氏 (愛知大学 地域政策学部 教授)



野本京子教授の退官を期して開催されたこの研究会では、野本氏に加えて、綱澤満昭氏(姫路大学学長)、岩崎正弥氏(愛知大学教授)の二人を迎えて、三人による報告とディスカッションがおこなわれた。

三人は農本主義研究において、それぞれの世代を代表する研究者である。綱澤氏は

1971年の『日本の農本主義』(紀伊国屋新書)によって、野本氏は1999年の『戦前期ペザンティズムの思想』(日本経済評論社)、そして岩崎氏は1997年の『農本思想の社会史 生活と国体の交錯』(京都大学学術出版会)を代表作とする。農本主義は、戦間期の産業革命に際して、反産業社会



的で反資本主義的な対抗思想として形成され、同時に、丸山真男を嚆矢として、国家主義・日本ファシズムの「温床」として把握されてきた。三人はこの重大かつ問題提起的なテーマに立ち向かってきた。農本主義の原初的なパトスの継承(綱澤氏)、その批判的理解とともに、

「下からの」歴史の文脈に農本主義研究を位置づけること(野本氏)、グローバルゼーションに対抗する「農の思想」と農本主義の可能性の掘り起こしを進めること(岩崎氏)。

報告はそうしたそれぞれの研究歴をそのまま反映して、三つの個性的な学



説の提示となり、つづく討論も熱く緊張感をもったものとなった。農本主義を語る研究会に出会えることは幸運である。野本京子教授の退官を惜しむとともに、三人の碩学が示してくれた学問の志に感謝したい。(友常勉)

Comparative Japanese Culture Division: Seminar "Historical Significance of Physiocracy/Peasantism: Past and Present"

Physiocracy/Peasantism developed as a counter-ideology to industrial society and capitalism during the inter-war industrial revolution. Masao MARUYAMA regarded it as a hotbed of nationalism and Japanese fascism. The three speakers addressed this important and problematic theme with their own individual theories: the inheritance of pathos in physiocracy (Michiaki TSUNAZAWA); the critical positioning of physiocracy research in the context of "bottom-up" history (Kyoko NOMOTO); "agricultural ideology" under globalization and physiocracy's potential (Masaya IWASAKI).

国際日本教育部門 国際シンポジウム

「国際日本研究と日本語教育—『日本をたどりなおす 29 の方法—国際日本研究入門』をたどりなおす—」

International symposium "Retracing '29 Ways to Travel Back to Japan' : Japanese Studies and Japanese Language Education"

- 日時 : 2016 年 3 月 5 日 (土) 14 : 00 ~ 17:40
- 場所 : 東京外国語大学 アゴラグローバル3F プロジェクトスペース
- 発表者・コメンテーター
 - ・ 友常勉氏 (東京外国語大学 准教授)
 - ・ 川口健一氏 (東京外国語大学 名誉教授)
 - ・ 山口裕之氏 (東京外国語大学 教授)
 - ・ 野本京子氏 (東京外国語大学 教授)
 - ・ 谷口龍子氏 (東京外国語大学 准教授)
 - ・ 山本富美子氏 (武蔵野大学 客員教授)
 - ・ 近藤安月氏 (東京大学 名誉教授)
 - ・ 内田正俊氏 (埼玉県川越南高校 教頭)
 - ・ 蕭孝君氏 (東海大学 (台湾) 助理教授)



会場の様子



2017年2月17日に国際シンポジウム「国際日本研究と日本語教育—『日本をたどりなおす29の方法—国際日本研究入門』をたどりなおす—」が本学アゴラ・グローバル3Fプロジェクトスペースで行われた。

これは昨年3月刊行された国際日本研究センター編



著の上記教科書に関連したシンポジウムで、教科書作成の目的や経過、構成・執筆の意図などにつき本学の執筆者、編集者である友常勉氏、川口健一氏（本学名誉教授）、

山口裕之氏、野本京子氏、谷口龍子氏が報告を行った。また、武蔵野大学客員教授 山本富美子氏、東京大学名誉教授 近藤安月氏、埼玉県川越南高校教頭 内田正俊氏、台湾東海大学助理教授 蕭幸君氏にはそれぞれの立場からコメントをいただいた。

その後も質疑応答、会場からのコメントがあり、会の終了後には同じ会場で茶話会も開かれ、海外からを含む40名余の出席者による情報交換、意見交換が和やかな雰囲気のもとに行われた。

（坂本恵）



On February 17th 2017, the 3rd floor project space in Agora Global (TUFS) hosted the international symposium "Retracing '29 Ways to Travel Back to Japan': Japanese Studies and Japanese Language Education". The aforementioned text was edited by ICJS and published last March. At the symposium, authors and editors from TUFS explained the text's aims and development, and the ideas behind its structure and composition. **Fumiko YAMAMOTO** (guest professor, Musashino University), **Atsuko KONDO** (Professor Emeritus, The University of Tokyo), **Masatoshi UCHIDA** (Vice-Principal, Saitama Prefectural Kawagoe Minami High School) and **HsingChun HSIAO** (Assistant Professor, Tunghai University) gave comments. Over 40 people attended.

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第20回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages the 20th Research Seminar”

- 日時：2016年12月17日（土）14:00～17:50
- 場所：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟419室）
- 発表者・講演者と題目
 - ・阿部新氏（東京外国語大学：日本語教育学、社会言語学）
「世界各地の日本語学習者が文法学習・語彙学習について考えていることを比べる—現地教師や日本人とも比較して—」
 - ・渡邊 己氏（東京外国語大学：セリリッシュ語）
「スライアモン・セリリッシュ語における動詞結合価の操作について」
 - ・中澤 英彦氏（東京外国語大学名誉教授：ロシア語、ウクライナ語）
「秘境」ウクライナの言葉をかんがえる」



会場の様子



阿部新氏「世界各地の日本語学習者が文法学習・語彙学習について考えていることを比べる—現地教師や日本人とも比較して—」

日本語教育において学習者や教師が学習に対してどのように考えているか、すなわち「ビリーフ」について、これまで多くの地域を対象として多くの調査・研究がなされている。しかし、いずれも各地域単独の分析、あるいは関連地域との

比較分析にとどまっていた。阿部氏は、より広域に比較検討する必要があるとの観点から、「メタ分析」の手法を用いてこれらの研究結果を集約し、世界諸地域の学習者が抱く、文法学習や語彙学習についてのビリーフを分析した。その結果、「文法も語彙も大切」「語彙が大切で文法は大切ではない」「語彙と文法の大切さは中程度」など、「正確さ志向」からみて世界各地の日本語学習者のビリーフには地域により有意な傾向が見られた。また時系列に目を向けるとビリーフに変化が見られることも結果に表れた。

データが一樣ではないなど種々の限界があり、多くの課題があると阿部氏自身も述べていたが、得られた結果は非常に興味深く、今後のさらなる研究や、ひいては日本語教育の現場にも大いに資するであろう報告であった。発表後の質疑応答も、分析の手法について、音声や文字など「文法・語彙」以外のビリーフについてなど活発に行なわれた。



渡邊己氏「スライアモン・セリリッシュ語における動詞結合価の操作について」

スライアモン・セリリッシュ語（Slammon Salish、以下ではスライアモン語と呼ぶ）は、北アメリカ北西海岸で話されている、いわゆる先住民諸語のひとつであり、系統的には、23言語からなるセリリッシュ語族の一言語である。スライアモン語は、動詞述部にボイス、

アスペクト、複数性、指小性、他動詞目的語、主語などが接辞法や重複法によって表示される。そのため、典型的にはしばしば複統合的であるとされる。これらの概念・機能が盛り込まれる動詞であるが、そこに明示的に組み込まれる項は2つまでという制限がある。すなわち、1項動詞か2項動詞しかありえないことになる。前者は自動詞、後者は他動詞である。意味的に3つの項に関わる動詞でも、動詞に表示されるのはあくまで2項であり、3項目は動詞には表示できない。あえて3項目を表示するのであれば、それは動詞述部とは別に、斜格の名詞項としてのみ表しうる。例えば、「あげる」という動詞では、あげるヒトが主語、もらうヒトが目的語となり、授受されるモノは斜格の名詞項でのみ表しうる。この制限があるために、スライアモン語では自動詞化する接辞と他動詞化する接辞を組み合わせ、動詞の中に組み込まれる項の数を1か2にする操作をおこなう。



中澤英彦氏（東京外国語大学名誉教授）
「秘境」ウクライナの言葉をかんがえる」

話者人口の多さやロシアの国力ゆえに、ロシア語が他のスラヴ諸語の基準と見なされ、ロシア語と異なる現象は基準からの逸脱や例外と映りがちだが、ロシア語もスラヴ諸語のひとつに過ぎず、ロシア語を基準として周辺の言語を見るという態度から脱却しなければならない。ウクライナ語を改めて見直すことで、ロシア語と他のスラヴ諸語との連続性が改めて認識される。このような基本的な立場から、中澤氏は主にロシア語、時にポーランド語と対照させながら音声、語彙、形態論、統語論にわたりウクライナ語の特徴を論じた。

ウクライナは、地政学的には西スラヴのポーランドと東スラヴのロシアに隣接するので、当然その言語には様々な分野で両民族の言語の橋渡しとなる現象（両言語からの段階的な偏差）が存在する。他方、ウクライナ語にはそれだけでは説明がつかない現象もある。この両面

がウクライナ語の特徴なのだと言う。

ウクライナ語の特徴は12世紀頃までには形成されていたが、その後絶えず隣国の支配を受け、二言語（三言語）使い分けの状態にあり、さらに頻繁にウクライナ語使用禁止令がしかれた。20世紀末までの約350年間、ウクライナはロシアおよびソビエト連邦の「庇護」の下にあったため、1991年にソビエト連邦の崩壊と相前後してウクライナが独立するまで、一つの独立した言語として世の中に十分に認知されていなかった。講演タイトルの「秘境」には、そのような意味が込められている。このようなウクライナ語の現状は、各個人の母語、各地域語から統一的な標準語を形成過程にあるという。

最後にウクライナ語の大きな特徴として、以下の5つの点が挙げられた。(1) 母音連続や子音連続を避ける傾向が見られる(例：

професор, ロシア語はпрофессор)。(2) 名詞類が格変化(主格, 対格, 属格, 所格, 与格, 具格, 呼格)し、動詞が完了相・不完了相という相(アスペクト)で二分され、相が時制(過去, 現在, 未来)の機能に優先する。(3) 屈折語の性質を色濃く保ち、例えば現代ロシア語ではなくなった呼格も残している。(4) 所有表現にはbe型(У мене є альбом)とhave型(Я маю альбом)が併存し、be型のロシア語とhave型のポーランド語の中間的な性質を持つ。(5) 東スラブ語だが、西スラブ語のポーランド語の影響も受けていて、東西両スラブ語の特徴を持つ。例えば「ネクタイ」にはロシア語系のгалстукとポーランド語系のкраваткаが併存している。

講演の話題はウクライナの歴史と文化 — 音楽、詩など — にも及び、中澤氏の圧倒的な知識とウクライナの言語文化に対する深い愛情が感じられる講演であった。(対照日本語部門)

Shin ABE summarized used “meta-analysis” to summarize these research results and analyze the beliefs of learners around the world about learning grammar and vocabulary, revealing, from an “accuracy-orientated” perspective, significant regional trends in the importance learners assign to grammar and vocabulary. **Honore WATANABE** showed how in verbal predicates in Siammon, voice, aspect, plurals, diminutives, transitive objects and subjects are expressed by suffixes or repetition. Siammon is thus often considered typologically as a synthetic language. A maximum of 2 arguments can be explicitly included in the verb. **Hidehiko NAKAZAWA** claimed that the practice of considering Slavic languages from the perspective of Russian, due to its large number of speakers and Russia’s global power, should be corrected. Russian is only one Slavic language among many. Reconsideration of Ukrainian reveals continuity with Russian and other Slavic languages. The characteristics of its phonology, vocabulary, morphology and syntax were then contrasted with Russian and Polish. The lecture touched on Ukrainian history, music and poetry, revealing Nakazawa’s erudition and love of Ukrainian language and culture.

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第21回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages the 21st Research Seminar”

●日時：2017年3月4日(土)14:00～17:45

●場所：東京外国語大学 研究講義棟 115 室

●発表者・講演者と題目

- ・三宅登之氏（東京外国語大学：中国語学）
「動作を前提とする形容詞——中国語の難易度を表す形容詞をめぐって——」
- ・中山俊秀氏（東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所：
ヌートカ語、談話機能言語学）
「スライアモン・セイリッシュ語における動詞結合価の操作について」
- ・山梨正明氏（京都大学名誉教授・関西外国語大学：
認知言語学、意味論・語用論）
「認知言語学の展望——言語科学の新たな革命」



会場の様子



三宅登之氏「動作を前提とする形容詞——中国語の難易度を表す形容詞をめぐって——」では、「簡単」(jiǎndān)と「容易」(róngyì)などの形容詞の用法をコーパス調査を基に、認知言語学のパラダイムで考察した。要旨は以下のようにまとめられる。

上記の形容詞はどちらも「易しい」という意味だが、「簡単」は連体修飾の用例が多く、対象物について叙述するのが基本用法であると考えられ、一方「容易」は連用修飾の用例が多く、動作について叙述するのが基本用法であると考えられる。述語用法の場合、「这个问题很简单」(この問題は易しい)のように対象物についての叙述に「簡単」が、「回答这个问题很容易」(この問題を解くのは易しい)のように動作についての叙述に「容易」が用いられるのは上述の考えに合致する。他方「这个问题很容易」(この問題は易しい)のように対象物についての叙述に「容易」が用いられる文では、「回答」(解く)という動作に代わって、対象物の「这个问题」(この問題)の方をプロファイルする(特に注目し際立たせる)ことにより、動作を前提としつつも、対象物そのものが「易しい」という属性を有するかのよう表現になっていると解釈できる。

反意語の「难」(難しい)も連用修飾の用例が多く、対象物について述べる場合は「容易」と同様に動作を前提とし、「很难的任务」(とても難しい任務)は「很难[完成]的任务」([完成するのが]とても難しい任務)のように述語を含意していると考えられる。

最後に英語と日本語の形容詞の用例にも触れながら、形容詞の叙述対象が動作・行為に対する臨時的な評価から対象物の恒久的な属性へ

と移行(プロファイルシフト)する条件についても考察し、「評価の恒常性が高いほど対象物が備えている属性と感じられやすい」とまとめた。

明解な論旨で、中国語の知識の無い聞き手にとっても非常にわかりやすく、他の言語の研究にも応用できそうな考え方が示された研究発表であった。(成田節)



続いて中山俊秀氏の「言語構造の「つかみにくさ」を考える - 語の単位に注目して -」は、言語研究において語の認定や文法を記述することの難しさを提示し、実際の言語使用を基盤とした新しい文法観を提示された。一般に、言語表現の組み立ては、形態素 - 語 - 句 - 節 - 文のように単位が組み合わせられ上位の単位を形成するとしている。単位の組み合わせや形式的まとまりと意味機能の関係に見られる規則性や体系性を捉えることを主眼とし、文法というのは、普遍的規則の体系、統合的の体系、かつ固定的、安定的な体系であるという認識がある。

しかしながら、現実の言語使用においては、語の定義は曖昧性、バラつきがあると指摘する。(たとえば、「*ǝ:asnaʃa:ikwaciɬ* ǝ-*{snaʃa:t-kwaciɬ* „彼は水で遊んできたから(ヌートカ語)のような「変わった語」の例からは通言語的「語」の定義の難しさがわかり、「ちよつとやばい系」「アカエリアシギ」(日本語)などのまとまりからは「語」と句などの境界線の曖昧さが感じられる)。また、実質語は機能語より語らしく、名詞は動詞より語らしい、また語自体が相互行為と結び

ついていたり、referent がある場合は、語として認定されやすい、な

ど「語らしさ」はバラつく。

理想化された「語」とは、固有、固定的なものであり、定義はぶれず、形態的統語的特性が基盤と考えられ、また変化も考慮されない。しかし、実際の「語」としての意識しやすさは文脈に依存し、定義も語によって異なり、形態統語的性質以外の要因が絡むこともある。さらに実際の語のまとまりや境界は変化する。つまり、語という単位意識は、構文、定型表現、生産的なパターン、言語使用のバラつき、揺れや変化などこれらすべての中から浮かび上がってくるものだというのである。こうした「語」意識を含む言語構造意識の形成を実際の言語使用の積み重ねの中に位置付けて捉えようとするのが言語使用を基盤とした文法研究である。そうした研究においては、固定的な文法規則を見つけようとするのではなく、言語使用のあり方が文法パターンを形成するメカニズムを明らかにすることを主たる目的にする。そこでは、使用パターンや頻度を調べることは重要であり、研究方法としては自然談話資料に基づく分析、頻度および分布など統計的分析や多様なジャンルにおけるパターンの把握などが有効であると指摘された。

中山氏の発表は、言語研究者が（ある意味確信犯として）触れずにいる点、理想的な言語体系の認識と現実の言語使用の有り様とのずれについてまっこうから論じるものであり、日頃共通の基盤として認識されているかのような「語」や「文」等の用語を認定することの難しさについてあらためて確認させられる内容であった。

（谷口龍子）

京都大学名誉教授・関西外国語大学教授の山梨正明氏による講演『認知言語学の展望—言語科学の新たな革命』では、認知言語学の誕生以前からその歴史を見てきた同氏によって、認知科学としての言語学の変遷、認知言語学の研究プログラムの概要、認知能力と言語現象の関連に関する大局的な見方が示された。また、持続可能な学問として言語研究が今後どのように発展していくべきかという問いに対する氏からの回答が示された。

講演では、最初に、認知言語学の背景となる認知科学の歴史

Takayuki MIYAKE presented a corpus-based survey of the use of the adjectives *jiāndān* and *róngyì* from a cognitive linguistics paradigm. Also making reference to adjectives in English and Japanese, he examined the conditions for a "profile shift" whereby adjectives change from describing a temporary evaluation of a movement or action to that of a perpetual property. In summary, increased constancy of evaluation prompts property readings. In a lecture entitled "The 'slippery' nature of language structure – a focus on the word unit", Toshihide NAKAYAMA showed the difficulties in determining the status of a word and recording grammar in language research, and offered a new usage-based view of grammar. Masaaki YAMANASHI (Professor Emeritus, Kyoto University; Professor, Kansai Gaidai University) spoke on "A view of cognitive linguistics – a new revolution in language science". Professor Yamanashi has observed the history of cognitive linguistics since before its birth. He explained the transition of cognitive science into linguistics, summarized the research field of cognitive linguistics, and provided a general view of the relation between cognitive ability and linguistic phenomena. He also offered proposals for how language research should continue as a sustainable discipline.



的な展開が紹介され、構造主義言語学から生成文法をへて認知言語学に至る言語学的な背景が示された。次に、言語能力の根源となる二つの要因である認知能力と言語運用能力が紹介されるとともに、言語体系を記号の体系とみなす認知言語学的な言語観 (Symbolic View of Grammar) が示された。さらに、

ゲシュタルト的な記号観と捉え方 (construal) という、認知言語学のパラダイムの背景となる二つの重要な考え方が示された。

その後、具体的に、各認知能力がどのように言語の構造を動機づけるかに関する紹介が行われた。ここでは、(i) 言葉のゲシュタルト性、(ii) スキャニング、(iii) 図地の分化・反転、(iii) 主観性と見えの変化、(iv) 参照点能力、(v) カテゴリー化 (スキーマ化、事例化、拡張)、(vi) 焦点移動の能力、(vii) 用法基盤モデルのアプローチ等の観点から、様々な言語現象が例示され説明された。特に、強調された点は、用法基盤モデルと身体性の観点である。

まず、人間が持つ言語知識は、言語使用の場から立ち現れ、ゆらぎながら定着しているとする用法基盤モデルの考え方を紹介することによって、私たち人間が持つ文法知識は、綺麗な体系性を持つものではなく、部分的であると同時に、具体事例等も含むかなり抽象性が低いものであるという考え方が示された。次に、世界を認識して言語化する基盤となる身体性の観点から言語を捉え直すという身体経験に基づく言語分析の重要性が示された。

発表では、折に触れ、他の発表者が扱った事例が認知言語学においてどのように位置づけられるかが示されるとともに、認知言語学の隣接分野である談話機能言語学との接点も示された。また、若手研究者に対しては、今後どのように言語研究を行っていくかに関する道しるべを示すと同時に、大学教員に対しては、大学で言語学を教え人材を育成するためにどうあるべきかとの問題提起も行うなど、本講演では、学問と教育に関する多岐に渡る話題が提供された。（大谷直輝）

比較日本文化部門主催 研究会「アルゼンチンの日本意識の変化」 Comparative Japanese Culture Division : Seminar "Change of the image toward Japan in Argentina"

- 日時：2016年10月20日(木)18:00～20:00
- 場所：東京外国語大学 本部管理棟 中会議室
- 発表者

- ・石田智恵氏（日本学術振興会特別研究員 PD）
「アルゼンチンにおける『日本』の表象・言説と『日系 japonés/nikkei』の位置」
- ・マティアス・チアッペ氏（アルゼンチン国費留学生）
「現代日本文学へのラテンアメリカ文学の影響」



会場の様子



比較日本文化部門「第2回研究会」として、石田智恵さん（日本学術振興会特別研究員 PD）とマティアス・チアッペさん（アルゼンチン国費留学生、本学留日センターに留学中）に報告をしていただいた。筆者は国立ラプラタ大学の客員研究員としてアルゼンチンに滞在した際に多くの日系人に世話になった。研究会を企画する

立場になり、アルゼンチンでの経験から日系人について取り上げようと考えた。

文化人類学者の立場からアルゼンチンの日系人研究をされている石田さんは、「アルゼンチンにおける『日本』の表象・言説と『日系 japonés / nikkei』の位置」というタイトルで報告を行った。アルゼンチンの日系コミュニティの歴史や構成にはじまり、日系人が抱える二重性（アルゼンチンからは「日本的」、日本からは「アルゼンチンの」とみなされる）、アカデミズムにおける日本や東洋への関心の変遷を取り上げた。石田さんはその他にも、「日本・日系」に関する文学者や、

現在のアルゼンチンにおける日本文化への関心など話題を広げ、内容の充実した報告だった。「日系人」の立ち位置は日本研究からもアルゼンチン研究からも微妙にずれたところにあり、そのことは、日系人研究がアルゼンチン、日本双方の地域研究を架橋する可能性を持っていることを示しているのだろう。石田さんに続いて、本学留日センターに留学中のマティアスさんが文学研究者として、現代日本文学へのラテンアメリカ文学の影響について歴史的な流れを報告した。これまでは日本人の文学研究者が日本文学とラテンアメリカ文学の関係について考えることが多かったが、マティアスさんの発表を聞

At the 2nd Research Meeting of the ICJS Comparative Japanese Culture Division, **Tomoe ISHIDA** (research fellow, Japan Society for the Promotion of Science) and **Matias CHIAPPE** (government sponsored foreign student, JLC TUFS) gave presentations. Ms. Ishida, a cultural anthropologist, presented "Images of and Discourse on 'Japan' and the Position of Nikkei Argentinians". Starting with the history and makeup of the Nikkei community, she covered their duality ("Japanese" to Argentinians, "Argentinian" to Japanese) and the shifting interest towards Japan and the Orient in academia. Next, Matias explained the historical influences of Latin American literature on modern Japanese literature.



き合う研究会になった。

いて、いよいよラテンアメリカ出身者の中から、同じテーマをめぐる議論できる研究者が誕生しそうだと確信した。石田さんが日本からアルゼンチンに向かったように、マティアスさんはアルゼンチンから日本へやってきた。二人の報告はまるでコインの表と裏のようで、双方向に声が響き合う研究会になった。

(久野量一)

2016 年活動報告 (2016 年 10 月～2017 年 3 月) Activity Report (Oct. 2016 ~ Mar. 2017)

■研究会・ワークショップ■

●2016 年 10 月 20 日 (木) 比較日本文化部門主催 研究会
『アルゼンチンにおける日本意識の変化』
石田智恵氏 (日本学術振興会特別研究員 PD)、
マティアス・チャッペ氏 (アルゼンチン国費留学生、留学生日本語教育センター)

●2016 年 12 月 17 日 (土) 対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 20 回研究会
阿部新氏 (東京外国語大学、准教授)、
渡邊己氏 (東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所)、
中澤英彦氏 (東京外国語大学名誉教授)

●2017 年 2 月 17 日 (金) 国際シンポジウム
「国際日本研究と日本語教育—『日本をたどりなおす 29 の方法—国際日本研究入門』をたどりなおす—」
友常勉氏 (東京外国語大学准教授)、川口健一氏 (東京外国語大学名誉教授)、
山口裕之氏 (東京外国語大学教授)、野本京子氏 (東京外国語大学教授)、
谷口龍子氏 (東京外国語大学准教授)、山本富美子氏 (武蔵野大学客員教授)、
近藤安月氏 (東京大学名誉教授)、内田正俊氏 (埼玉県川越南高校教頭)、
蕭幸君氏 (東海大学 (台湾) 助理教授)

●2017 年 3 月 4 日 (土) 対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 21 回研究会
三宅登之氏 (東京外国語大学)、
中山俊秀氏 (東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所)、
山梨正明氏 (京都大学名誉教授・関西外国語大学教授)

●2017 年 3 月 17 日 (金) 比較日本文化部門主催
研究会「農本主義をめぐる磁場—歴史そして現在」
網澤満昭氏 (姫路大学 学長)、
岩崎正弥氏 (愛知大学 地域政策学部教授)、
野本京子氏 (本学 教授)

■会議歴■

●センター会議: 2016 年 10 月 7 日、12 月 9 日、2017 年 2 月 8 日

■Lectures and Workshops■

●Thur. 20 Oct. 2016: Seminar hosted by Comparative Japanese Culture Division
"Change of the image toward Japan in Argentina"
Tomoe ISHIDA (research fellow, Japan Society for the Promotion of Science)
Matias CHIAPPE (government sponsored foreign student, JLC TUFS)

●Sat. 17 Dec. 2016: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages"
The 20th Research Seminar hosted by Comparative Language Division
Shin ABE (Associate Professor, TUFS),
Honore WATANABE (Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa at TUFS),
Hidehiko NAKAZAWA (Professor Emeritus, TUFS)

●Fri. 17 Feb., 2017: International Symposium "Retracing '29 Ways to Travel Back to Japan': Japanese Studies and Japanese Language Education" hosted by International Japanese Education Division
Tutomu TOMOTSUNE (Associate Professor, TUFS)
Kenichi KAWAGUCHI (Professor Emeritus, TUFS)
Hiroyuki YAMAGUCHI (Professor, TUFS)
Kyoko NOMOTO (Professor, TUFS)
Ryuko TANIGUCHI (Associate Professor, TUFS)
Fumiko YAMAMOTO (Guest Professor, Musashino University),
Atsuko KONDO (Professor Emeritus, The University of Tokyo),
Masatoshi UCHIDA (Vice-Principal, Saitama Prefectural Kawagoe Minami High School),
Hsing-Chun HSIAO (Assistant Professor, Tunghai University, Taiwan)

●Sat. 4 Mar. 2017: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages"
The 21st Research Seminar hosted by Comparative Language Division
Takayuki MIYAKE (Professor, TUFS)
Toshihide NAKAYAMA (Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa at TUFS)
Masaaki YAMANASHI (Professor Emeritus at Kyoto University, Professor at Kansai Gaidai University)

●Fri. 17 Mar. 2017: Seminar: "Historical Significance of Physiocracy: Past and Present"
hosted by Comparative Japanese Culture Division
Michiaki TSUNAZAWA (President of Himeji University)
Kyoko NOMOTO (Professor, TUFS)
Masaya IWASAKI (Professor, Aichi University)

■Meetings■

●Center meetings: 7 Oct. 2016, 9 Dec. 2016, 8 Feb. 2017

■今後の活動予定■

●7 月 12 日 (水) ~ 14 日 (金) 国際日本研究センター主催
夏季セミナー 2017 「言語・文学・社会」—国際日本研究の試み—
講師:
徐一平氏 (北京外国語大学) 中国
趙華敏氏 (北京大学) 中国
范淑文氏 (国立台湾大学) 台湾
于乃明氏 (国立政治大学) 台湾
蕭幸君氏 (東海大学) 台湾
金鍾德氏 (韓国外国語大学校) 韓国
尹鎬淑氏 (サイバー韓国外国語大学校) 韓国
李吉鎔氏 (中央大学校) 韓国
スコット・ヒスロップ氏 (シンガポール国立大学) シンガポール
タサニー・メータービスイット氏 (タマサート大学) タイ
ダワー・オユンゲレル氏 (モンゴル国立大学) モンゴル
春名展生氏、野平宗弘氏、久野量一氏 (東京外国語大学) 日本

※同時開催「サマースクール院生研究発表会」

7 月 12 日 (水) 15:15-18:25

7 月 13 日 (木) 15:15-17:55

■Future Events■

●10:10-15:05, Wednesday-Thursday, 12-13 July
10:10-14:10, Friday, 14 July
Summer Seminar 2017 "Language, Literature, History: Constructive Approach to International Japanese Studies"

by XU Yi Ping (Beijing Foreign Studies University)
ZHAO Hua Min (Peking University)
FAN Shu Wen (Taiwan University)
SOO Wen Lang (National Chengchi University)
HSIAO Hsing Chun (Tunghai University)
KIM Jongduck (Hankuk University of Foreign Studies)
YOUN Hosook (Cyber Hankuk University of Foreign Studies)
LEE Kilyong (Chung-Ang University)
Scot HISLOP (National University of Singapore)
Tasaneeth METHAPISIT (Thammasat University)
Oyungeerel DAVAA (National University of Mongolia)
Norio HARUNA, Munehiro NOHIRA, Ryoichi KUNO
(Tokyo University of Foreign Studies/UFS)

※Associated event Summer School 2016

"Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies"

15:15- 18:25 Wednesday, July 12, 2017

15:15- 17:55 Thursday, July 13, 2017

お知らせ

NOTICE

野本京子先生を送る

友常勉

本年3月、野本京子先生が退官された。1988年に東京外国語大学外国語学部に講師として着任されて以来、29年間、本学の教育・研究、そして大学運営に貢献されてきた。研究面では農本主義研究を踏まえた近現代農業・農業史研究を核として、ジェンダー史、社会史、オーラルヒストリーなどの分野で多くの業績をあげ、教育面では留学生教育、日本課程の教育、そして大学院教育を通して多くの外語大生・研究者を育ててこられた。国際日本研究センターにとっては、2009年のセンター発足以来、センター長の重責を担ってこられた、第一の功労者である。国際日本研究センター主催の毎年の夏季セミナー・サマースクールが、東アジア各国各地域の研究者と大学院生との緊密なリレーのもとで運営されてきたことの最大の理由は、野本先生の公私にわたる献身のおかげである。しかも、それは野本先生の功績の一端に過ぎない。

私は中国で二年間、日本人専門家として勤めたあと、2007年に野本先生を責任者とする「特色GP 教養日本力」というプロジェクトの研究員として採用され、本学にお世話になることとなった。ただし1997年に本学の大学院地域文化研究科（当時）に入学したとき、野本ゼミにはゼミ生としてご厄介になったことがある。その意味で私は大学院生として、そして研究員、さらに教員として野本先生を見てきたことになる。野本先生の研究・教育がそなえている高潔で豪放、そして繊細な風格については、あえて私が述べるまでもないが、安丸良夫先生のような異端思想研究への柔軟な目配り、ラディカルなジェンダー研究を受け入れる高度でハイブリッドな理論的センス、そして流行にけっしてとらわれることのない揺るがない批判精神について、私は少し近くでそれに接し、そのつど深く教えられてきたので、そのことについては感謝をこめて記しておきたい。数えきれないほど多くの酒席の場で一緒にさせていただいたが、朗らかで鷹揚な野本先生は、先生が直近で読んだ話題の書に、少しでも論理的な瑕疵あるいは時代への安易な迎合があると、きわめて厳しい論客に変わった。学問の厳しさが要請する緊張がそこにはあり、不動の柱か岩の存在をそこに感じたものである。私は、私たちの学びの場から、また一人、〈師〉が去っていったことに惜別を感じているが、国際日本研究センターの一員としては、野本先生がつくりあげた軌跡を継承して、さらにそれを伸ばしていくことを通して、その恩に報いたいと思っている。野本先生、ありがとうございました。

Farewell to Professor Kyoko NOMOTO

Tsutomu TOMOTSUNE

Professor Kyoko NOMOTO retired this March. Joining in 1988 as an undergraduate lecturer, she contributed to education, research and administration at TUFS for 29 years. She produced a large body of research centered on physiocracy and modern agricultural history, but extending to areas including gender history, social history and oral history. She has nurtured many researchers through her efforts at both undergraduate and postgraduate level. She undertook the heavy responsibility of leading ICJS following its inauguration in 2009 and has made the utmost contribution. The Center's annual summer seminar and summer school, held in close partnership with researchers and students throughout East Asia, is largely a product of her efforts.

第11回博報財団招へい研究者・国際日本研究センター特任研究員の紹介

2017年3月より半年間、モンゴル国立大学法学部日本法教育研究センター准教授のダワー・オユンゲレル先生が博報堂研究者奨励金により、国際日本研究センターの特任研究員として本学にいらっしゃいました。

先生の研究テーマは、日本とモンゴルの日本語教育における読解教育の実践に関する比較対照研究です。さらに、外国語教育における読解教育の系譜を辿るべく、日本における国語教育の在り方や方法も視野に入れて研究をされる予定です。日本語がネイティブ並みに堪能なだけでなく、日本料理や日本の伝統文化などにご興味がおありでとても気さくで楽しい方です。（受入担当教員：谷口龍子）

Davaa Oyungerel (associate professor, Japanese language center, faculty of law, National University of Mongolia) arrived in March 2017 for a 6 month term as a project researcher at ICJS, with the support of a Hakuodo Foundation Japanese Research Fellowship.

She is conducting contrastive research into practical Japanese language reading comprehension pedagogy in Japan and Mongolia. In order to trace the development of reading comprehension pedagogy, her research will also include the state of the art in Japanese language teaching to native speakers. Fluent in Japanese to native level and with interests in Japanese cuisine and culture, she is cheerful and entertaining.



『日本語・日本学研究』第7号発刊のお知らせ

2017年3月31日に弊センタ発行のジャーナル『日本語・日本学研究』が発刊されました。詳しい内容は以下のURLからご確認ください。

<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/nl/jo0007.pdf>

“Journal of Japanese Studies” vol.7 has been released

On 31st March, the new issue of “Journal of Japanese Studies” has been released. The on-line data of publications are also available at the following URL.

<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/nl/jo0007.pdf>



発表者募集

東京外国語大学国際日本研究センターでは、国内外の大学院生との研究交流の場として「サマースクール研究発表会」を開催します。ついては、下記のように発表者を募集いたします。

夏季セミナー2017「サマースクール研究発表会」

日程：2017年7月12・13日（水・木）15：15～17：30

会場：東京外国語大学府中キャンパス研究講義棟 1階

☆応募資格：日本に関する言語・文化・文学・歴史・社会のいずれかを専門分野として研究
あるいは比較・対照研究を行っている大学院生
（応募・発表に際しては、指導教員の承認を得ること）

☆発表形式：口頭発表（発表時間20分＋質疑応答10分）

☆期日：2017年5月16日（火）応募者エントリー締め切り

2017年5月22日（月）発表者決定（5月23日（火）以降、メールでお知らせします）

☆応募手続き：応募様式（以下のURLを参照）

並びに指導教員の推薦状（100字程度）を下記までメールで
お送りください。（件名に「研究発表応募（氏名）」と記載）

※募集要項及び応募様式

<http://www.tufts.ac.jp/common/icjs/jp/news/170405.html>

【提出先：info-icjs@tufts.ac.jp（東京外国語大学国際日本研究センター宛）】



☆お問い合わせ：上記のメールアドレスまでお願いします。

*発表者には院生発表の司会を担当していただくこともあります。

また、国際日本研究センター発刊のジャーナル『日本語・日本学研究』（2018年3月発刊予定、電子版のみ）に発表要旨を掲載しております。希望者は同誌への論文投稿も可能です（査読有）。

ご応募をお待ちしております！

夏季セミナー2017 言語・文学・社会

—国際日本研究の試み—

2017年7月12日（水）～14日（金）10:10～18:25

会 場：東京外国語大学府中キャンパス
研究講義棟102室

◆JR中央線「武蔵境」駅～西武多摩川線「多磨」駅下車徒歩5分
◆京王電鉄「飛田給」駅北口～多磨駅行京王バス10分

「サマースクール研究発表会」

7月12日（水）15:15-18:25

7月13日（木）15:15-17:55

研究講義棟103～106室

東京外国語大学国際日本研究センターは、アジアを中心に日本語・日本研究の第一線で活躍されている研究者を講師にお招きし、世界における国際日本研究の現状を学内で直接学べる機会を提供しています。第5回となる今回も講師とともに海外の大学院生を招聘し、研究発表を通して国内外の院生同士が交流できる場を設けます。言語・文化・歴史・文学・教育・社会などの分野において各国・各地域で進展している日本研究の現在に触れてみませんか。奮ってご参加ください。

Program

7月	12日（水）	13日（木）	14日（金）
10:10 10:55	春名展生 東京外国語大学	野平宗弘 東京外国語大学	ダワー・オウンゲレル氏 国際日本研究センター特任研究員・ モンゴル国立大学(モンゴル)
10:55 11:40	スコット・ヒスロップ氏 シンガポール国立大学 (シンガポール)	范淑文氏 国立台湾大学(台湾)	尹鎬淑氏 サイバー韓国外国語大学校(韓国)
昼食休憩			
12:40 13:25	蘇文郎氏 国立政治大学(台湾)	久野量一 東京外国語大学	タサニー・メーターピスィット氏 タマサート大学(タイ)
13:25 14:10	趙華敏氏 北京大学(中国)	蕭幸君氏 東海大学(台湾)	徐一平氏 北京外国語大学(中国)
休憩			
14:20 15:05	李吉鎔氏 中央大学校(韓国)	金鍾徳氏 韓国外国語大学校(韓国)	総評 サマースクール修了式
15:15 18:25	大学院生の研究発表会	大学院生の研究発表会 (17:55まで)	

(大学院生懇親会)

夏季セミナー
サマースクール